

研究者のオアシスに出会い

陳 菁 (中国河海大学農業工程学院)

プロジェクトに参加して

書こうとした時に、とても1ページに収まらないと思った。その理由はプロジェクトから得た感想や収穫はあまり大きくて多いから。でも、1ページにする。

2002年の農業土木学会の受賞式で、渡辺紹裕先生と初めてお目に掛かり、それがオアシスプロジェクトへの参加のきっかけとなった。それ以来、中流域の農業用水について主に張掖周辺の調査をしてきた。祈連山北側のこの広い扇状地は、水さえあれば、生産性のよい農地となる。流域水利用については、地理的利便性のよい中流域はどうしても多くの水を使ってしまい、下流域の水不足を起こしやすいのが特徴である。

最近考えたこと

黒河の水管理を理解するには次の二点が重要である。

その一つは利用可能な水資源が極めて限られており、統制的な水管理を必要とする。施設の整備が不十分であるため、強い公権力の元でその管理を実現する。清代からの分水規程もそうだし、近年の調水でも「全線閉口、集中下洩」の措置をとった。調水期間中では、行政側や公安が62の無制御の取水口で立ち回り、24時間制を取って取水特に夜の取水を防ぐ。

その二は中国の政治体制である。政府の機能が大きく、その機能を実現する役人たちの昇進や評価に関する下(民衆)からのシステムが存在せず(あるいは弱い)、すべては上(上級政府)からのものである。従って、それぞれのレベルの政府や役人は民衆の需要よりも、むしろ上の政策に耳を傾け、上司の顔を伺う。黒河調水や節水型社会の建設など評価すべき中央の政策を現場で執行する際に、ずれや問題が生じるのはこのためである。国務院が定めた分水案は黒河の年河川流量に関してだけだから、それに従えばよい。そのため、下流にとっては重要な分水の時期や量などのパターンを考えなくてもよい。また、地表水の制限による地下水利用へのシフトや地下水位の低下など目に見えない問題は、中央政府から言われぬ限り、それを放任し、

結果がいくら嚴重であると分かっているながら行動さえ取らない。

このように山積みの環境、経済、民族問題を抱える広大な中国では、中央政府が集権に恵まれて国家を制御する一方、色々な問題を中央政府まで持っていかないと解決できず、処置をとっても手遅れの状況に陥る。黒河流域の地下水位低下や下流域生態危機はこれに属する。これは中国の政治体制のジレンマである。

いかに民主の要素を入れつつ、流域の水配分を合理的に行うのか。これには政治体制の改革や、流域住民の教育レベルの向上、参加意識の喚起が必要である。

感心したこと

このプロジェクトは研究者のオアシスと私は思う。

いつもニコニコしている中尾先生は、様々な個性と分野を持つ研究者を織り込み、日本初の多分野の総合的な研究に取り組んだ。プロジェクト参加者に最大の力を発揮できるように自由な空気を作り、中尾先生はその笑顔の後ろに強く包容力と鋭い洞察力を持ち、冷静にプロジェクトの進展を見極め、必要とするところに手を打つ。最近また、地球研の中国に関するプロジェクトの整合に着手しておられ、まさに現代のチンギスハンの影が見える存在です。感心した。

一見冷たく見えるが実に繊細な心遣いをする窪田先生、可愛いほど真面目な遠藤先生、頭の回転が速い小長谷先生、面倒見のよい相馬先生。また賢い多くの若手研究者の集まり、プロジェクトメンバーに感心した。

プロジェクトの仲間はいつでも自由に議論でき、話し合い、お互いに知識や分野を補い啓発し合い、次々と良い成果に結びつける。プロジェクトの活発且つ和やかな空気に感心した。

総合地球環境学研究所には立派な研究者が多く集まり、開放的な研究空間と開放的な学术交流の場を作り出した。それに感心した。

かつての日本留学経歴は私のかけがいのないものであった。今回のオアシスプロジェクトに参加した経験も今後の研究生活に大きな影響をおよぼすに違いない。

オアシスプロジェクト、地球研に感謝します。また、調査にあたり多大な協力を下さった現地の人々に感謝します。